

『とはずがたり』における動詞「聞く」の意味用法

磯部佳宏

1 はじめに

動詞「きく」の意味・用法について、小学館の『古語大辞典』では、「①耳にする」「②聞いて従う。聞き入れる」について、「③尋ねる。問いたです」を挙げ、

「散り散らず聞かまほしきを古里の花見て帰る人も会はなむ」(拾遺・春・49)

「君(=光源氏)も今更に漏らさじと忍び給へば、(右近ハ)若君(=玉鬘)の上をだにえ聞かず、あさましく行方なく過ぎゆく」(源氏・夕顔)

のように、中古の『拾遺和歌集』や『源氏物語』の用例を掲出している。

一方、『角川古語大辞典』では、「①耳に音を感じとる。また、耳を傾ける」「②耳にとめる。聞いて知る。ことばを聞いて知識を得る」の次に、「③訊く。尋ねて知る。相手の答を求め問う」を挙げるが、

中古までは、この意に用いられた例を確認しがたく、「心とゞめて問ひきけかしと、あぢきなくおほす(源氏・帚木)」など、それらしい例も②とみなすべきものが多い。と解説し、③の用例としては、

「今のは何んだよときく。めんどうに成り、われを忘れ大声にて、屁だといふに」(譚囊)

「エ、この衆は、おゑどの事は聞申さない。…ドレさきへいつて聞ますべい」(膝栗毛初)

と、いずれも近世の作品の用例を掲げている。中世において、「③訊く。尋ねて知る。相手の答を求め問う」の意として認めるべき用例が存在するかについての言及はない。

小林(2009)は、古代語における「質問する」意味を表す動詞について、

古代語において、相手に問いかける意、すなわち<質問>の意味に用いられたのは、もっぱら「問フ」であり、「交番で道を聞く」のような「聞ク」の用法は、近代語において発達するに至ったものである。「尋ヌ」の場合も、<質問>の意味は本来的なものではなく、次第に発達してきたものとみられる。

と述べたうえで、中古和文における「きく」と「たづぬ」の用例を詳細に調査・考察したうえで、次のように結論付けている。

全体的な流れとしては、複合動詞の場合を中心として、「尋ヌ」が<質問>の意味への拡張を始めつつあるのに対して、「聞ク」の場合、<質問>の意味ともみられる例が散見するという段階ではあるが、意味拡張の萌芽は認められた。

本稿では、中世における「きく」の意味・用法について検討するために、中世の日記文学『とはずがたり』における「きく」の用例を詳しく調査・分析する。「訊く」の意で使用されているとすれば、「問い」の表現から接続するケースが多いと考えられるが、筆者は、かつて『とはずがたり』の疑問表現について詳細な調査を行っており、その結果も考察の際の手がかりとなると考えられる。また、同じく「訊く。質問する」意を持つと考えられる「たづぬ」「とふ」の用例についても調査し、「きく」との比較を行なう。テキストは「新編日本古典文学全集」によるが、本文引用の際は、「とはずがたり総索引」の本文を参照して、表記については私意により改めた場合がある。また、心中思惟の部分には〈 〉を付した。

2 「きく」

『とはずがたり』には、動詞「きく」の用例が全103例見られる。全103例の使用場面と、それぞれの場合の「きく」の主体について、用例数を示したのが下の表1である。

表1

場面	主体
地の文67	作者58 後深草院4 父1 入道1 尼君1 尼御前たち1 数寄者ども1
会話文19	後深草院6 作者5 有明の月3 雪の曙1 大殿1 前の関白1 東二条院1 中間1
心中思惟6	作者4 弟子1 人1
和歌10	作者7 雅忠1 常良1 女房1
消息1	作者1

地の文における用例が、全体の約3分の2を占め、日記文学という作品の性格からか、作者自身が「きく」の動作主体である用例が全75例と圧倒的多数となっている。

大部分の用例は、

- (1) (父)「言ふかひなく寝入りにけり。起こせ」など言ひさわぎけるを、(後深草院ハ) きかせおはしまして、「よし、ただ寝させよ」と言ふ御気色なりけるほどに、(巻1)
- (2) 所のさまは、眺望などはなけれども生身の如来とききまらすれば、たのもしくおほえて、(巻4)
- (3) 人の物言ひさがなさは、やうやう天の下のあつかひぐさになるときくもあさ

ましけれど、 (巻3)

(4) 都の方のことなどきくほどに、睦月の初めつ方にや、東二条院御悩みと言ふ。

(巻5)

(5) 雪の曙も、山々寺々までも、思ひ残す隈なく、たづねらるるよしきけども、

つゆも動かれず、隠れ居て、 (巻2)

のように、「耳にする」「聞いて知る」意で使用されている。(2)~(5)の動作主体は、いずれも作者自身である。

これに対して、「訊く」の意かとも考えられそうな用例は、以下の4例であろう。

(6) 大納言の音して、「御粥参らせらるるにや」ときくも、また見るまじき人のやうに、昨日は恋しき心地ぞする。 (巻1)

(7) (作者)「いかなる人の住まひ所、跡なくなるにか」ときくほどに、「六波羅の南方、式部大輔討たれにけり。その跡の煙なり」と申す。 (巻1)

(8) 還御の夕方、女院の御方より、御使に中納言殿参らる。(作者)「何事ぞ」ときけば、「二条殿がふるまひのやう、心得ぬことのさぶらふ時に、この御方の御伺候を止めてさぶらへば、ことさらもてなされて、三衣を着て御車に参りさぶらへば、人のみな、「女院の御同車」と申しさぶらふなり。これ、詮なくおぼえさぶらふ。よろづ面目なきことのみさぶらへば、暇を賜はりて、伏見などに引き籠りて、出家してさぶらはむと思ひさぶらふ」といふ御使なり。(巻1)

(9) 帰さには、そのわたり近き小家を借りて宿るに、(作者)「さても、情けありて、しるべさへしつる人、誰ならむ」ときけば、(家の主)「三の欄直行忠といふ者なり。これは館の主なり。しるべしつるは、当時の一の欄宜が二郎、七郎大夫常良といふ」など語り申せば、 (巻4)

それぞれの用例について、詳しく検証していく。

まず、(6)の用例は、「新編日本古典文学全集」(以下、「新編全集」と略称)では、「父の声で、「お粥を召しあがるのでしょうか」と聞いているのも」のように現代語訳していることから、「御粥参らせらるるにや」を父の会話文としているのに対し、「講談社学術文庫」(以下、「学術文庫」と略称)では、「父大納言の声がして、朝のお粥を差上げていられるらしい様子につけても」と訳していることから、「御粥参らせらるるにや」の部分を作作者の心中思惟とみていると考えられる。つまり、前者では「訊く」の意に、後者では「聞いて知る」の意に解しているようである。「新編全集」が、「参らせらるる」の部分「召し上がる」の意に解している点も疑問だが、地の文における「きく」の用例の主体が作者自身である場合が圧倒的に多いことから、「大納言の声がして、<(大納言に対して)お粥を差しあげているのであろうか>と(思って)

聞いているのも」のように、「御粥参らせらるるにや」を作者の心中思惟と解釈するのが妥当のように思われる。

(7) の用例は、「学術文庫」では「どういう人の家が焼けてしまうのかと聞いてみると」と現代語訳していることから、「いかなる人の住まひ所、跡なくなるにか」を作者の会話文における「問い」の表現とみていると考えられよう。一方、「新編全集」では、「「どんな人の家が、焼けているのだろう」と聞くうちに」と訳していることから、「いかなる人の住まひ所、跡なくなるにか」を作者の心中思惟と考えているように思われる。つまり、「学術文庫」が、「訊く」の意に解釈していると思われるのに対し、「新編全集」は「耳にする」の解釈ではないかと思われる。この部分、「きく」と「申す」が対応しているように思われなくもないが、「いかなる人の住まひ所、跡なくなるにか」という、断定の助動詞「ナリ」の連用形「ニ」に係助詞「カ」が下接し、以下が省略された形は、「問い」の形式として使用される場合もあるものの、本来的には「疑い」を表す疑問表現形式であることから、この部分を作者の心中思惟と解し、「<どんな人の家が、焼けているのだろう>と（思って）（騒ぎを）聞いていたところ」のように解釈することが適切なように思われる。

(8) の用例については、「新編全集」は「「何事でしょう」と聞くと」と訳していることから、「何事ぞ」を作者の会話文における「問い」の表現とみて、あきらかに「訊く」の意に解しているのに対し、「学術文庫」では「何事だろうと聞けば」と訳していることから、「何事ぞ」を作者の心中思惟と考えているようにも思われ、そうであれば、「耳にする」の解釈ということになる。「何事ぞ」の形は、たしかに「問い」の表現として多用されるが、心中思惟において「疑い」の表現として使用される場合も多く、この用例も、「<何事だろう>と（思って）聞いていたところ」のように解釈することが可能である。

(9) の用例は、「新編全集」は「「ところで、親切にも道案内までもしてくれた人は、どなたでしょうか」と尋ねると」と訳して、「訊く」の意としての解釈を明確に示しているのに対し、「学術文庫」では「ところで親切に案内までもしてくれた人はどなたでしょうかと聞けば」と、訳語としてはそのまま「聞く」を使用し、また会話引用のカギも付していないが、「誰」を「どなた」と訳していることから、やはり「訊く」の意としての解釈ではないかと思われる。しかし、「誰ならむ」のように文末に推量の助動詞「ム」を含む疑問表現は、「疑い」の表現としての使用が本来的であり、この場合も、この部分を作者の心中思惟と考えて、「<それにしても、親切に道案内までもしてくれた人は、誰だろう>と（思って）聞いていたところ」のような解釈の余地は充分にあるように思われる。

「～ときく」の直前の部分を、作者の心中思惟であると解釈することについては、

- (10) (仲頼)「…」と言ふ。(作者)〈あな、あさまし〉ときくほどに、例の御姆、
「…」と言ふ。(巻1)

のように、「きく」が明らかに「耳にする」「聞いて知る」意で使用されている用例においても、「〈まあ、あきれたこと〉と(思っ)聞いていると」のごとく、「きく」の直前に動詞「思ふ」を補って解釈すべき用例が存在していることから、けっして不自然ではないと考えられる。

また、(6)～(9)のいずれの用例においても、会話文と考えることもできる、それぞれ「御粥参らせらるるにや」「いかなる人の住まひ所、跡なくなるにか」「何事ぞ」「さても、情けありて、しるべきへしつる人、誰ならむ」の文中に、聞き手に対する敬語を含んでいないことから、会話文ではなく、作者の心中思惟であると判断する妥当性は高いと考えられる。

以上、本作品における「きく」の用例全103例中、「訊く。質問する」の意とみる可能性がある用例はわずかに4例であるが、いずれも「耳にする。耳にとめる」の意でも解釈可能なものであると考えられる。

3 「たづねきく」

動詞「きく」が「たづね」と複合した「たづねきく」の用例が、本作品中に3例見られる。

- (11) (作者)「いづれの御幸にか」とたづねききまらすれば、「遊義門院の御幸」
と言ふ。(巻5)

(12) いとあはれにて、(作者ガ)何となく御所さまのことたづねきけば、(女房)「みな昔の人は亡くなり果てて、若き人のみ」と言へば、(巻5)
のように、地の文における用例が2例で、動作主体はともに作者自身である。また、

- (13) (男)「…、時の国司、里の名をたづねききて、「ことはりなりけり」とて、
吉田の里と名を改められて後、稲うるはしく身も入りはべり」など語れば、
(巻4)

のように、会話文での用例が1例であるが、いずれも「訊く。質問する」の意であると考えられる。

少数ではあるが「たづねきく」の語形が使用されているという事実は、やはり「きく」単独では、いまだ「訊く。質問する」の意を充分には持ち得ていなかったことの証と考えられるのではないだろうか。

なお、動詞「とふ」と「きく」との複合動詞形「とひきく」の用例は、本作品中には存在しない。

4 「たづぬ」

『とはずがたり』には、動詞「たづぬ」の用例が全33例見られる。そのうち、

(14) さるほどに、(後深草院ハ) あちこちたづねらるれども、いづくよりか、ありと申すべき。(巻2)

(15) そのわたりにて鼓をたづねて、善勝寺これを打つ。(巻2)

(16) 驚きて、在庁が中より馬はたづねて参らせたりけると聞きしも、(巻4)

のように、「探し求める」の意で使用されているものが17例、また、

(17) 十五日の夕つ方、「河崎より迎へに」とて、人たづぬ。(巻1)

(18) 兵衛佐のもとへ、(作者)「この花散らさむ先に、都の御所へたづね申すべし」と申して、(巻5)

のように、「おとずれる。訪問する」の意で使用されていると考えられるものが8例である。

これに対して、「他の人に問う。質問する」の意で使用されているものは、全8例であるが、表2は、その場合の使用場面と、「たづぬ」の主体について示したものである。

表2

場面	主体
地の文7	作者2 雪の曙2
	左衛門尉1 男1
	女院の御方1
消息1	雪の曙1

このうち、消息で使用されている、

(19) (雪の曙の文)「この春のころよりわづらひつるが、なのめならず大事なるを、道の者どもにたづぬなれば、「御心にかかりたるゆゑ」など申す。…」とあり。(巻2)

の1例以外は、地の文で使用されており、そのうち5例までは、

(20) (雪の曙)「御尋ねの白物は、何にかはべる」とたづねらる。霜・雪・霰とやさばむも、まことしく思ふべきならねば、ありのままに、(作者)「世の常ならず、白き色なる九献を時々願ふことのはべるを、かく名立たしく申すなり」といらふ。(巻1)

(21) 泣き濡らしたる袖の色もよそにしるかりけるにや、(雪の曙)「いかなること

ぞ」などたづねらるるも、「問ふにつらさ」とかやおほおえて、物も言はれねば、
(巻3)

(22) 女院の御方より、「ただ今の御盃はいづくにさぶらふぞ」とたづね申されたるに、新院の御前にさぶらふよし申されたれば、
(巻3)

(23) (左衛門尉)「涙川と申す川はいづくにはべるぞ」といふことを先の度たづね申ししかども、知らぬよし申してはべりしを、
(巻4)

(24) 男二、三人、宮人とおほしくて、出で来て、「いづくよりぞ」とたづぬ。(作者)「都の方より結縁しに参りたる」と言へば、
(巻4)

のように、その主体は作者以外の人物であり、質問されている対象が作者自身である。作者が主体の2例のうち、1例は、

(25) 女院御覽ぜられて後、「とは何事ぞ。うつつなや」と仰せ言あり。(作者)「何事ならむ」とたづね申せば、(女院)「その身をこれにて、『…』とかへすがへす申されたり」とて笑はせたまふもむつかしければ、
(巻3)

のように、身分が上位の相手に対して、謙譲語とともに使用された例である。また、もう1例の、

(26) 備後国といふ所をたづぬるに、ここに留まりたる岸よりほど近く聞けば、下りぬ。
(巻5)

については、「新編全集」では、「備後国という所はどこかたずねたところ」と現代語訳して「他の人に問う。質問する」の意とみているが、「備後国という所をさがしていたところ」のように「探し求める」の意でも解釈可能のようにも思われる。

なお、「たづぬ」には、「御たづね(あり)」の形で尊敬語として使用されている用例が、全18例見られる。「御～(あり)」の形での使用は、「きく」や「とふ」には見られないものである。「御たづね(あり)」の用例のうち、

(27) (乳母)「御好みの白物なればこそ申せ。なき折は御たづねある人の、申すとなれば例のこと。さらば、さてよ」とつぶやきて去ぬ。
(巻1)

(28) 朝はまだとく、四条大宮の御母がもと、六角櫛笥の祖母のもとなど、(後深草院ハ)人を賜はりて御たづねあれども、「行く方知らず」と申しけり。(巻2)のように、「探し求める」の意で使用されているものが9例、また、

(29) (作者)「夜の長さとして、御目覚まして、御たづねある」と(近衛の大殿ニ)言ふにことつけて、
(巻2)

のように、「おとずれる。訪問する」の意で使用されていると考えられるものは1例のみである。

これに対して、「他の人に問う。質問する」の意で使用されているものは、8例みられるが、表3は、その場合の使用場面と、「たづぬ」の主体について示したものである。

表3

場面	主体
地の文6	後深草院5 遊義門院1
会話文2	後深草院1 有明の月1

- (30) (隆顕)「…、御参りありて、御帰りありし御道にて、(有明の月)「まことにや、かくと聞くは」と御たづねありしに、「行く方なく、今日までうけたまはる」と申したりしに、…」など語るを聞けば、(巻2)
- (31) 御母が母伊予殿、「あな珍し。御所よりこそ、「これにや」とて、たびたび御たづねありしか。…」など語るを聞くにも、(巻2)
- のように、会話文で使用されている2例以外は、すべて地の文における用例で、
- (32) 引き開けつつ、いと馴れかほに入りおはしまして、(後深草院)「悩ましくすらむは、何事にかあらむ」など御たづねあれども、(巻1)
- (33) 御所、「一人ならぬ罪科は、親類累るべしや」と(善勝寺の大納言ニ) 御たづねあり。(巻2)
- (34) 扇換へにしたりしを持ちて参りたるを、さきざきの筆とも見えねば、(後深草院)「いかなる人の形見ぞ」など、ねんごろに御たづねあるもむつかしくて、(巻2)
- (35) そのころ、真言の御談義といふこと始まりて、(後深草院ガ) 人々に御たづねなどありしついでに、(有明の月ガ) 御参りありて、(巻3)
- (36) (後深草院)「…。そのほか、またかやうの所々、具し歩く人もなきにしもあらじ」など、ねんごろの御たづねありしかば、(巻4)
- (37) 御所さまにもねんごろに御たづねありて、(遊義門院)「今は常に申せ」など仰せありしかば、(巻5)
- のように、(37) 以外は、敬意の対象となる主体はすべて後深草院であり、(33) (35) 以外は、質問されている対象は作者自身である。

5 「とふ」

『とはずがたり』には、動詞「とふ」の用例が全19例見られるが、そのうち、

- (38) 讃岐の白峰、松山などは、崇徳院の御跡もゆかしくおぼえはべりしに、とふべきゆかりもあれば、漕ぎ寄せて下りぬ。(巻5)
- のように、「訪問する。おとずれる。たずねてゆく」の意で使用されているものが2例、
- (39) (作者) <ただ、とくして世の常の身になりて、静かなる住まひをして、父母の後生をもとひ、六趣を出づる身ともがな>とのみおぼえて、またこのつきの末には出ではべりぬ。(巻1)
- (40) 鳥辺野の空しき跡とふ人、内野には所もなく行き違うさま、<いつかわが身も>とあはれなり。(巻5)
- のように、「とむらう。弔問する」の意で使用されているものが6例である。

これに対して、「他の人に尋ねる。質問する」の意で使用されているものは、11例であるが、そのうち4例は、

- (41) 泣き濡らしたる袖の色もよそにしるかりけるにや、(雪の曙)「いかなることぞ」など尋ねらるるも、「とふにつらさ」とかやおぼえて、物も言はれねば、(巻3)
- (42) 「とふにつらさ」の涙もろさも人目あやしければ、忍びてまた年も返りぬ。(巻4)

のように、いずれも古歌からの引用と考えられる「とふにつらさ」の形である。

表4は、「他の人に尋ねる。質問する」の意で使用されている、それ以外の7例について、その使用場面と、「とふ」の主体について示したものである。

表4

場面	主体
地の文3	作者3
心中思惟1	院1
和歌3	作者1 女房1 人1

和歌における用例の3例は、いずれも作者の詠んだ和歌中のものである。

- (43) (作者) 忘れぬ昔をとへば悲しさもこたへやるべき言の葉ぞなき (巻4)
- (44) (作者) 物思ふ袖の涙をいくしほとせめてはよそに人のとへかし (巻5)
- 心中思惟における唯一の用例である、

- (45) (作者) <女房たちの中に、<あやし>と見る人などのありて、<ひが目にや>とてとはるるにこそ>など案じ居たるほどに、(巻4)
- は、「とふ」の主体が作者以外であるが、地の文における3例は、

(46) きたなげなき男二人会ひたり。(作者)「このわたりに隅田川といふ川のはべるなるは、いづくぞ」ととへば、「これなむその川なり。・・・」など語れば、
(巻4)

(47) ここは須磨の浦と聞けば、「行平の中納言、藻塩垂れつつわびける住まひもいづくのほどにか」と、吹きこす風にもとはまほし。
(巻5)

(48) 徒歩なる女房の中に、ことに初めより物など申すあり。とへば、兵衛佐といふ人なり。
(巻5)

のように、いずれも、「とふ」の主体が作者自身である用例である。なお、(46)の本文は、あきらかに『伊勢物語』の東下りの物語を踏まえていると考えられ、その部分で、
京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。渡守にとひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、
(9段)

のように、「とふ」が使用されていることが影響を与えているようにも思われる。

このように、『とはずがたり』における「他の人に尋ねる。質問する」の意で使用されている「とふ」は、和歌の用例に偏り、地の文における用例も、平安時代の作品との関連で使用されているなど、作者にとっては「たづぬ」よりも古風な語という認識があったのではないかとも思われる。

6 おわりに

『とはずがたり』に使用されている、動詞「きく」の用例全103例中、「訊く。質問する」の意かとも考えられそうな用例は、わずかに4例のみである。これらの用例についても、詳しい検証・考察の結果、いずれも「耳にする。耳にとめる」の意でも解釈可能なものであると考えられる。また、本作品には、「たづねきく」の用例が3例見られ、いずれも「訊く。質問する」の意で使用されており、このことから、やはり「きく」単独では、いまだ「訊く。質問する」の意を充分には持ち得ていなかったのではないかと思われる。

なお、「訊く。質問する」の意の動詞が使用されず、

(49) (作者)「いかがすべき」と言ふほどに、(雪の曙)「まづ、大事に病むよしを申せ。・・・」などとぞ添ひ居て言はるれば、
(巻1)

(50) (入道)「田舎にあるべしもおほえぬ筆なり。いかなる人の描きたるぞ」と言ふに、(主)「これにおはしますなり」と言へば、
(巻5)

のように、「問い」の表現を「言ふ」が受ける場合も見られるが、本作品で、「訊く。質問する」の意として主用されていると考えられる動詞は「たづぬ」であり、「御たづね(あり)」の形で尊敬語として使用されている用例も含めると全16例見られる。「御

～(あり)」の形式での使用は、「きく」や「とふ」の場合には、見られないものである。「たづぬ」の動作主体は作者以外の場合が14例と圧倒的に多く、一方、作者自身が質問されている対象となっている用例が目立つ。

これに対して、「とふ」が「訊く。質問する」の意として使用されているのは、古歌からの引用を除くと7例であるが、そのうち和歌における用例が3例と目立ち、地の文における3例の動作主体はいずれも作者自身であり、「たづぬ」の場合と対照的であるように思われる。

『とはずがたり』においても、「きく」については、単独では、いまだ「訊く。質問する」の意を充分には持ち得ていなかったのではないかと考えられることから、小林(2009)の中古和文の調査と比べて大きな変化はないように思われるが、「たづぬ」については、単独で、「訊く。質問する」の意を完全に獲得し、むしろ「とふ」に替わって主用されていると考えられる。

[参考文献]

『古語大辞典』小学館(1983)

『角川古語大辞典』角川書店(1982～1999)

『新編日本古典文学全集 とはずがたり』小学館(1999)

『講談社学術文庫 とはずがたり(上)(下)』講談社(1987)

『とはずがたり総索引[本文篇]』笠間書院(1992)

『とはずがたり総索引[自立語篇]』笠間書院(1992)

『新編日本古典文学全集 伊勢物語』小学館(1994)

磯部佳宏(1997)「『とはずがたり』の疑問表現(上)－要説明疑問表現の場合－」

(「日本文学研究」第32号)

磯部佳宏(1998)「『とはずがたり』の疑問表現(下)－要判定疑問表現の場合－」

(「日本文学研究」第33号)

小林賢次(2009)「「聞ク」と「尋ヌ」の語史

－古代語における<質問>の意味の成立をめぐって－

(「国語と国文学」第1024号)